明石の史跡（６９）義経と明石浦

元暦２年（１１８５）３月２４日、壇ノ浦の合戦後の義経の足取りについては、

同（４月）十四日、九郎大夫判官義経、平氏男女のいけどりどもあひ具してのぼりけるが、播磨国明石浦にぞつきにける。名をえたる浦なれば、ふけゆくまゝに月さへのぼり、秋の空にもおとらず。（平家物語巻１１）

とあって、壇ノ浦から２０日後に、ここ明石に到着している。それも、建礼門院（安徳天皇の生母）をはじめ、前内大臣（平宗盛）・平大納言時忠ら、入水したものの救助された人々たちを、引き連れていた。そのなかには、安徳天皇を抱いて、入水、しかし存命した按察局の姿も------（吾妻鏡元暦２年４月１１日条）。

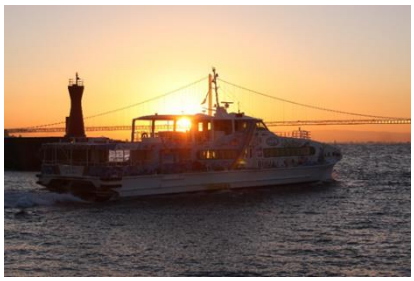
義経は、なぜ明石浦に上陸したのだろうか。重要人物を同道しての都までの道中を考えたならば、より都に近い兵庫の方が、よいのではなかろうか。

明石浦というのは、東は、山田川河口部右岸より、明石川左岸までをさす。この山田（神戸市垂水区西舞子）の地には、治承５年（１１８１）閏２月４日に亡くなった、清盛の遺骨が当地の法華堂（所在地不詳）に埋葬されており（吾妻鏡同日条）、建礼門院、平宗盛そして義経と、それぞれが清盛とは浅からぬ因縁の持ち主たちが、うちそろって法華堂につどうという、フィクションの世界に足を踏み入れても、なんら不思議ではない。

山田から東へ８キロ。そこは須磨一の谷（神戸市須磨区一ノ谷町）。１年前の２月７日、逆落としという奇襲作戦により、平氏をして再起不能にいたらしめた大勝利の場所である。義経主従は、感慨にひたったであろう。

さらに山陽道を東へ８キロあまりで旧福原京にいたる。宗盛にすれば、福原遷都がなかりせば、との思いも脳裏をかすめたかもしれない。すべては夢の跡である。『平家物語』が、義経をして明石浦に足跡をしるさせたのは、悲劇の前のひとときの栄光を象徴しているように思える。

日本歴史学会会員　茨木　一成



明石港口